わたしの聖戦 ジ・ハード

◎◎女性が働くということ◎◎ 60

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津江

15の母

「15歳の母が…」の声がテレビから流れてきた。同名のドラマが少し前にあったはずだが、画面を見ると、作り話ではなく現実を追ったものだった。

15歳の中学生が、同年代の男の子と付き合って妊娠、迷った末に生む決意をする。リアルな破水、出産の場面から、夜泣きに苦労する姿、そして資格を取るために看護学校に入る決意をするところまで、時間にすれば15分程度であったが、思わず画面に食い入るように観てしまった。

少女の家族構成は、母親と兄の3人暮らし。どういうわけで3人暮らしなのか、母親はまたは兄は何をしているのか、赤ちゃんの父親、つまり付き合っていた男の子とはその後別れたとのナレーターが入るが、今はどうしているのか、そういった周辺事情の深い説明はない。ただ、少女の決意と出産、家族の協力と自立への道を見出した姿を淡々と描いていた。

少女は出産後、毎日育児日記をつけている。夜泣きのことやおっぱいの出のこと、子供の成長や母親との会話などの日常が、若い子特有の丸文字と絵文字で、でも思いのほかしっかりとした文章で綴られている。少女の母親はまだ若く、40になったかならないかといった感じ。子の母親はこっちといわれればむしろそのほうが自然かもしれない。子育てをサポートするために仕事を休んでおり、全面的に育児に参加しようという決心が伺えた。

さて、スタジオにはいつもどおり「識者」と呼ばれる人が控えており、ビデオを観、そして一言意見を述べる。その日の識者はふたりとも年配の男性だった。嫌な予感がした。案の定、それは的中した。

「あまり褒めてはいけないのでしょうが…」とつまらん前置きをした後、「…よくやっていて驚きました」とぼそぼそ言う。あるいは何だか的外れな感想じみたことを口にする。それで終わり。何故もっとたくさんの激励をしてあげられないのだろう。どうして素直に素晴らしい母親ぶりとたたえてやらないのだろうか。

少女の妊娠がわかったとき、男性医師が母親を別室に呼び、「娘さん、事件を起こしますよ。そのうち虐待して子供を殺して逮捕されますよ」と言われたという。くやしくて母娘抱き合って泣いたと打ち明ける場面がある。なんという短絡さ、なんという貧しい心。このような産婦人科医が野放しになっている現実。それに触れる「識者」はいない。

日本は未曾有の少子高齢化を迎えている。このままだと日本という国の存続は困難なところまできている。識者のひとりは元知事である。そのくらいのことは百も承知だろう。未婚の母を一番に推奨せよとはいわないが、皆でこういう若い母親をバックアップしていこう、くらいの現実的な賛美の声がなぜ出ないのかと、その能天気ぶりには言葉もない。

テレビ側も、制作する立場として何を狙っていたのかわからないが、あらかじめゲストの人選に無頓着ではなかったか？こういう話題のときには、女性を登場させ、くだんの医師への苦言や未婚の母が多い国際事情、そして少子化問題の根の深さまで発言させて欲しかったと思う。

赤ん坊以外は、少女やその家族たちの顔に皆モザイクがかかっていた。そうせざるを得なかった本人たちの気持ちや今の社会にこそ重い課題があるのだと痛感させられた内容でもあった。

イラスト・三浦義雄